

東本願寺への献木 (和町)

ある夜のこと、仰明寺では村の門徒が集まって何か話し合っています。

仰明寺のこえんさんが、

「皆の衆、よう聞いて下され。京都の東本願寺が焼けたことは、すでに聞いておられることと思つが、今度新しく建てられることになり申した。それで全国各地の門徒の方々より木や瓦、畳、縄、毛綱などが、どんどん寄進されるといふことでこえんす。和田の村からはいかなもんですかのつ。」

と話されますと、門徒たちは、

「できることなら、わしらの気持ちとして、この村からも杉の木の本でもつこうついでいただきとつござんすのつ。」

「ほつや、ほや。いいことが一つできんすのつ。」

「木は宮領地(熊野神社の土地)の杉の木を、みんなでこうたら(買ったたら)どうじやるのつ。」

「ほれが一番ようござんしよのつ。」

と相談しあいました。こえんさんは、

「皆の衆の真心には、きつと仏様や御先祖様も

喜んでおくれるでしょうのつ。ありがたいこと

でこえんす。木の規格からいうと大人三人が手

をつないだぐらいの太さで、長さは十三、四間

(約二十五メートル位)ということでごえんす

でのつ。ひどういけえ(大きい)木でおおこつ

(大変)ですが、皆の衆、力を合わせて一つが

んばつておくんさい。」

と、大そう喜ばれました。

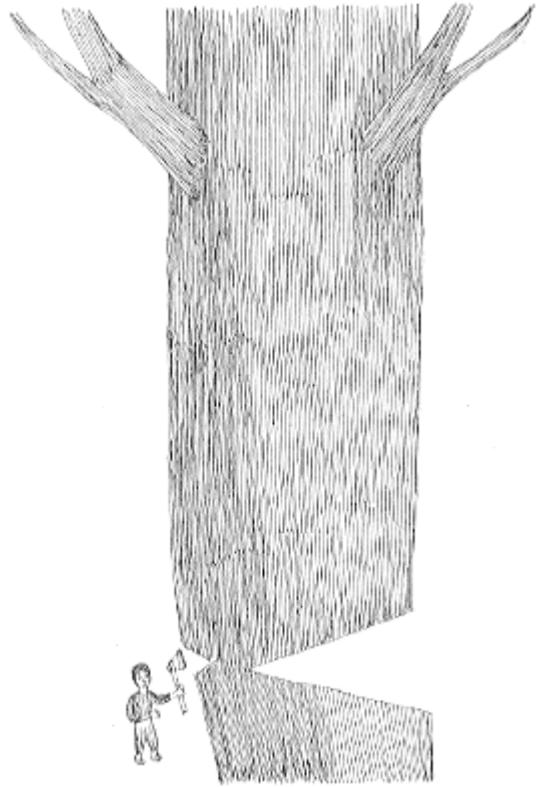
門徒たちは、和田の山からどうやって大きな木

を出そうかと相談を続けました。

「日野川まで、先ず出さにはあ(出さなければ)

ならんのつ。なんか(何か)いいすべ(方法)

がねえかのつ。」



ば、枝葉が木の水気を吸うて軽くなるで
のう。」

「木を引つ張る縄が要りんすのう（いり
ますね）よほど太い縄でねえと危のう
ごえんすでのう。」

「夜なべに少しずつ編まにやあなりませ
んのう。」

「とてもおつつかんで（追いつかない
ので）足りん分は、買わにやあなりま
せんやろ。」

「ごえんさんは嬉しそうに皆の話を聞
いておられましたがあふと、立ち上がられ
て言われました。」

「えー。木を出しなはる時は、くれくれも気を配
つておくんなさいのう。献木では今までも、あ
ちこちで命を落とされたり、怪我をされた人が
多いと聞き申す。そんなことが無いように、よ
う段取りをしておくんなさいのう。」

「いけえ木やで荷車に乗せるわけにもいかんし、
原木をそのまま引つ張つても石や砂利で木に傷
がついてしまつでのう。」

「ほうすると、やつぱし雪の上を滑らせることし
か考えられんのう。」

「木は夏の間に切り倒してそのまま寝かせておけ

和田のお寺のごえんさんと村の門徒達との会話が一本のろうそくの灯りを囲んで夜おそくまで続きました。

明治十四年二月十六日の朝早く、大きな杉の木の周りには総勢八十余名の村の門徒がぞくぞく集まってきました。

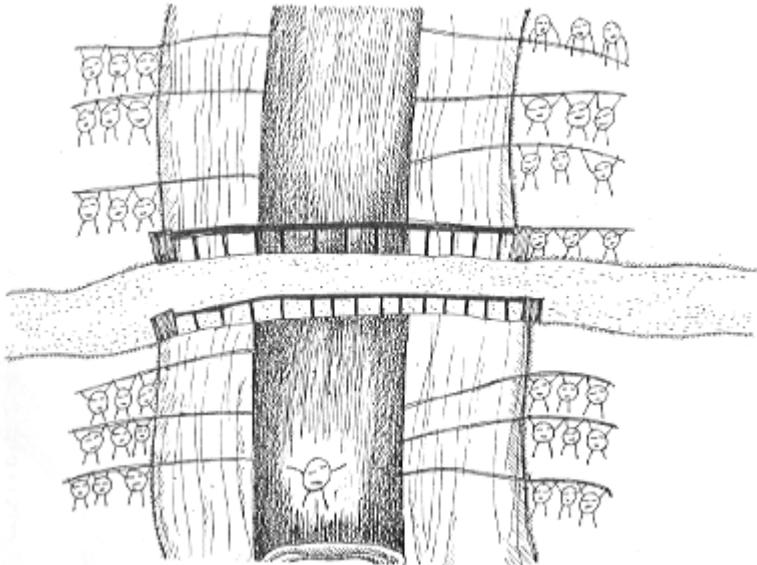
杉の木の根っこには、太い藤づるが巻かれ、そこに三十本余りの太い縄がくくりつけられ、一本の縄には、二人ないし三人の人が並びました。

大勢の門徒の先頭で、ごえんさんが無事を祈願してお経を上げておられます。お経が終わると、

「よーいしょ、よーいしょ。」

という勇ましいかけ声が始まりました。何本もの縄がぴーんと張って、大きな木が真っ白な雪の上を生き物のように動いて行きます。

こんなに寒い日なのに、みんなの顔からは汗がしたたり落ちています。現在のようなアスファルトの広い道ではありません。でこぼこした雪道を



あつち滑り、こつち滑りしながら、力を合わせて引つ張つて行きます。

自分たちが苦勞して引つ張っている木が、京都東本願寺の建物の一部に使つて頂けるんだという喜びに湧きたち、一人のけが人もなく日野川まで運ぶことが出来ました。

「わあーい。着いたぞう 着いたぞう。」と歓声が上がりました。皆の心が一つになり、善い事が出来た喜びに村の人達は感激で一ぱいでした。日野川のこうとうでは、早速、祝いの盃がまわりました。

明治十四年二月二十四日には、和田から出された杉の太木が日野川より三國港に運ばれたことが、館庄兵衛氏宅の記録に残っています。

日野川から三國港まで筏に組んで運ばれた木は、東本願寺差し向けの集材の船に積まれて、大阪の木揚げ場に運ばれたと言つてことです。